

ラハティ・ポリテクニクとの友好協力協定等に関する協議及び パッケージデザイン教育の動向調査

西頭徳三* 森田 力** 前田和紀(前田一樹)*** 水野元洋***

目 次

1. はじめに
2. ラハティ・ポリテクニクとの協議
 - 2.1 交流の現状
 - 2.2 協議の内容と成果
3. ラハティ・ポリテクニクの概要
4. ラハティ・ポリテクニク・デザイン学部の実習室等の運営, 管理
5. デザイン学部学生作品等の展示
6. パッケージデザイン教育の動向
7. おわりに
8. 資料 - フィンランドの概要 -
 - 8.1 基本情報
 - 8.2 教 育
 - 8.3 フィンランドのデザイン

1. はじめに

2004年3月初旬, 西頭徳三, 森田力, 前田和紀(前田一樹)及び本学事業課の水野元洋の4名は, 高岡短期大学(以下, 「本学」という)と友好協力協定を締結しているフィンランド共和国ラハティ市のラハティ・ポリテクニク(以下, 「ラハティ校」という。)を訪問した。

本訪問の目的は, 学生作品の相互交流展の継続や友好協力協定にかかる両校の交流関係について一層推進することについて提案し, 協議を行うこと, さらにラハティ校の特色ある教育内容, 運営方法, 施設・設備等をつぶさに視察・研究し, 本学の管理・運営と教育の一層の向上に役立てようとするものである。

また, この度のフィンランド訪問では, ラハティ校でのパッケージデザイン教育の講義を通じてラハティ校の実態・特色について, より深く理解することができたと考えている。

本稿では, 両校交流の一層の推進を図る上で大きな成果を得ることができた協議の内容を報告すると共に, ラハティ校の実態について調査の内容を紹介することとしたい。

本稿各章の担当については, 「2. ラハティ・ポリテクニクとの協議」及び「3. ラハティ・ポリテクニクの概要」を前田と水野が, 「6. パッケージデザイン教育の動向」を前田が担当し, その他の章は西頭及び森田が担当した。

なお, 今回のフィンランド訪問にあたっては, ラハティ校・デザイン学部において長年にわたって教鞭をとり, 同校と本学, さらに日本との交流の推進に常々多大のご尽力をいただいている児島宏嘉先生に全面的にお世話になったことを付記し, 誌面を借りて厚くお礼を申し上げたい。

2. ラハティ・ポリテクニクとの協議

2.1 交流の現状

本学とラハティ校との間においては、1997年11月に「友好協力関係に関する協定」が締結され、その第2条において、(1)研究と教育に関する情報と成果の交流、(2)教官及び学生の交流の実施を通じて友好協力関係を促進するとしている。1998年9月には、両校の間で「学生の交流に関する覚書」が取り交わされ、2002年1月には、学生の交流に関する覚書の一部変更がなされ交流人数を拡大し、今日では各年度4名以内の学生を相互に受け入れることとなった。同年9月には、「教員の交流に関する覚書」と「学生作品の相互交流展に関する覚書」が取り交わされている。

このような取決めにに基づき、学生の交流に関しては、1998年度から2004年度までの間に、ラハティ校から計11名の学生を受け入れており、本学からも1999年度から2004年度までに計15名の学生を同校デザイン学部へ派遣している。教員の交流は、協定締結前の事前調査を含め、これまでに十数名の交流を実施しており、2003年8月から本学教員1名を1年間派遣した。また、学生作品の相互交流展は、「学生作品の相互交流展に関する覚書」のきっかけとなった作品展が、1998年6月～7月に本学で開催された後、2002年9月～10月にラハティ校において本学学生の作品展、2003年12月に、再び本学においてラハティ校・デザイン学部学生の作品展を開催した。

学生作品の相互交流展は、覚書において「2002年4月から2003年3月の間にラハティ・ポリテクニクにおいて、2003年4月から2004年3月の間に高岡短期大学においてそれぞれ1回開催する。2004年以降の開催については、交互に開催することを基本として両大学の協議により決定する。」と定められており、2004年以降の開催について、早急に協議する必要があると併せて、本学の法人化、再編統合についての説明と今後の交流について協議するため、今回ラハティ校を訪問することになったものである。

2.2 協議の内容と成果

2004年3月8日にラハティ・ポリテクニクを訪問

ラハティ側は、学長のRisto ILOMAKI（リスト・イロマキ）氏、国際関係担当者のTimo AHONEN（ティモ・アホネン）氏及び児島氏が出席、本学から西頭学長、森田教授、前田教授ほかが出席



「学生作品の相互交流展に関する覚書」について協議するILOMAKI学長、AHONEN氏、西頭学長

「学生作品の相互交流展に関する覚書」について

ア 西頭学長から、以下のことについて説明

- ・ 本学としては、本交流を今後も継続したい
- ・ 隔年、相互開催を提案（2年に1回開催、場所は交互に行う）
- ・ 2005年4月から2005年9月の間にラハティで開催を提案
新大学となる前の2005年（H17）9月までに開催したい
4年後の2009年（H21）では、高短最後の専攻生作品及び新4年生作品の展示が可能

イ 上記説明を踏まえ、覚書の更新（案）を提示

ウ ラハティ側は、何の問題もない旨発言

エ 本覚書の更新について合意を得られたので、日本へ持ち帰り、正式な覚書について担当者及び事務局レベルで調整を行い、郵送により署名を取り交わすこととなった



協議終了後の西頭学長、ILOMAKI学長、AHONEN氏

「友好協力関係に関する協定」について

- ア 西頭学長から、日本の国立大学が4月から法人となること、本学が2005年10月から再編統合することを説明し、今後、「友好協力関係に関する協定」については、学部間ではなく大学間の協定として考えたい旨説明
- イ ラハティ側から、本学の考えについては賛成であり、むしろチャンスが拡大するので大変喜ばしいことと発言
- ウ 「友好協力関係に関する協定」に関する意見は、日本へ持ち帰り、適正な時期に検討



協議終了後ILMAVIRTAコンソーシオム事務局長を交えての昼食風景

その他の懇談概要

- ア 元ラハティ・ポリテクニク学長のArvo ILMAVIRTA (アルボ・イルマビルタ) コンソーシオム事務局と会食を交え懇談
- イ 西頭学長から、今後の交流について一層円滑に行うため、前田教授を高岡短期大学の窓口教員としたい旨提案・紹介し、ラハティ側も快諾

このような意見交換が行われ、ラハティ校側の好意と児島氏のご尽力により上記のように学生作品の相互交流展に関し、スムーズに基本的合意に至ることができたものと考えている。

なお、協議の中で本協定である「友好協力関係に関する協定」については、双方前向きな意見があり、今後の交流について、なお一層の発展が期待できることとなった。

以上のような協議の成果に基づき、既に学生作品の相互交流展に関する新たな覚書が作成されている。

3 ラハティ・ポリテクニクの概要

ラハティ・ポリテクニクのあるラハティ市は、フィンランド共和国の首都ヘルシンキの北北東約100kmに位置し、人口は約10万人、フィンランド家具製造の中心地である。家具製造の外、主たる産業としてビール、衣料の製造等がある。

ラハティ・ポリテクニクは、既存の8つの高等教育機関(単科)を統合して、1992年に創設された、全く新しいタイプの4年制の総合的な高等教育機関で、以下の8学部を擁し、社会の諸分野の実務者・専門家養成を目的としている。

- Faculty of Business Studies (経営学部)
- Fellmanni Institute (観光・接客管理学部)
- Institute of Design (デザイン学部)
- Institute of Fine Arts (美術学部)
- Faculty of Music (音楽学部)
- Faculty of Technology (工学部)
- Faculty of Social and Health Care (介護・福祉学部)
- Pajulahti Institute of Sports (スポーツ学部)



ラハティ市の冬景色 (- 14)



自動車部品によるオブジェ
(デザイン学部校舎)

友好協定締結の経緯

平成7(1995)年 フィンランド 日本修交75周年に当たる当年に北陸では初めてフィンランド協会（高岡フィンランド協会）が設立された。その際、高岡市立美術館において「フィンランドの歩み展」が開催された。



ラハティ校へ留学中の本学学生

平成9(1997)年9月 ラハティ・ポリテクニクと富山県デザイン協会との企画による「デザインとやまinフィンランド」をラハティ市で開催するなど、デザインの先進地でありヨーロッパから高い評価を受けているフィンランド共和国のラハティ市とデザイン工芸都市を目指す高岡市との間の友好関係が次第に深まった。

ラハティ・ポリテクニクと本学との協定締結は、こうした過程の中でワークショップにラハティ・ポリテクニク関係者（児島先生）や本学教員も参加するなどして交流が深まり、デザイン教育交流など話題提供がなされ、持ち上がったものである。

協定締結状況

- H 9(1997).11. 5 友好協力関係に関する協定書
- H10(1998). 9.17 学生の交流に関する覚書
- H14(2002). 1.30 学生の交流に関する覚書の一部変更（受入学生数）
- H14(2002). 9.18 教員の交流に関する覚書
- H14(2002). 9.18 学生作品の相互交流展に関する覚書

交流状況

(1) 教職員

日 程	員数	渡 航 者	用 務
H 9(1997). 9.19 ~ 10. 4	1名	矢口忠憲（デザイン）	事前調査
H 9(1997).11. 4 ~ 11.10	2名	宮本匡章（学長） 松田幹夫（事業課長）	協定調印
H12(2000). 2.22 ~ 3. 4	2名	倉田久敬（造形） 丸谷芳正（造形）	ヨーロッパにおける工芸教育システムの調査
H13(2001).12. 2 ~ 12. 9	5名	水島和夫（副学長） 林 哲三（造形） 中村滝雄（造形） 内藤裕孝（造形） 新井健二（学生課）	協定協議 ・学生交流人数増（2 4） ・学生作品相互交流展 ・教員の交流
H14(2002). 2.13 ~ 4. 3	1名	矢口忠憲（デザイン）	在外研究員 / 海外研究開発動向調査 （ユニバーサルデザインの研究）
H14(2002). 9.16 ~ 9.30	1名	林 暁（造形）	本学学生作品展式典出席及び視察
H14(2002). 9.22 ~ 9. 27	1名	宮崎雅司 （大学開放センター）	
H15(2003). 8. 1 ~ H16(2004). 7.31	1名	今淵純子（造形）	フィンランド工芸技術や工芸品の調査研究
H16(2004). 3. 6 ~ 3.11	4名	西頭徳三（学長） 森田 力（デザイン） 前田一樹（デザイン） 水野元洋（事業課長）	協定協議、及びパッケージデザイン教育の動向調査

(2) 学生

年 度	派 遣	受 入	備 考
H10 (1998)		2名	
H11 (1999)	2名	2名	派遣：専攻科産業造形専攻 2名
H12 (2000)	2名		派遣：専攻科産業造形専攻 2名
H13 (2001)	2名	1名	派遣：専攻科産業造形専攻 1名 専攻科産業デザイン専攻 1名
H14 (2002)	3名	3名	派遣：専攻科産業造形専攻 2名 専攻科産業デザイン専攻 1名
H15 (2003)	4名	2名	派遣：専攻科産業造形専攻 3名 本科産業造形学科 1名
H16 (2004)	2名	1名	派遣：専攻科産業造形専攻 2名

(3) 学生作品相互交流

H10(1998). 6.26 ~ 7.2 高岡短期大学エントランスホール

H14(2002). 9.25 ~ 10.8 ラハティ・ポリテクニク

H15(2003).12.2 ~ 12.15 高岡短期大学エントランスホール

4. ラハティ・ポリテクニク・デザイン学部の実習室等の運営、管理システム

工作機械等の取り扱い説明や現場での作業指導、安全指導、メンテナンスや工具の貸し出し工具の補修、補充等は常駐で専属の技官が行っている。学生は機械、工具の使用上のルール説明等を技官から受け、自由に使用することができるが、工具等の貸し出しの際は、番号を付番したバッチにより、誰に貸したか把握できるようになっている。技術的あるいは操作上からないことなどは適時技官に相談しながら制作を行うことができる。技官の役割分担が明確にされていることによって、教員はデザインの指導に専念することができ、総合的にも効果的な指導が可能になる。したがって、学生も特定の指導教員を探し求めることがなく、それぞれのプロセスでスムーズに制作をすることができるなどのメリットが生まれる。



技官による指導



モデル制作風景



工具の管理

また、保護具の使用を義務付け安全作業を実施するとともに、実習室に救急箱が備え付けられており、全員の安全に対する意識があり、工具等の貸し出しシステムにおいても、より徹底した指導と配慮が安全意識の向上と安全管理に繋がっているものと感じられ、本学も見習うところが大きいと思われた。

5. 学生作品等の展示手法

今回訪問したラハティ校デザイン学部で感じたことは、廊下や階段の空間、部屋の様々な壁面を利用して作品等の展示がされていることである。本学と比較した場合、本学では、一定期間、特定の場所に学生作品全てを展示する方法であるのに対して、デザイン学部の場合は展示可能なスペースを利用し、年間を通じて常時展示している。この展示は厳選された作品のみが展示されることになっており、学生の作品制作への意欲を高揚させるものとなっている。

デザイン学部では、授業科目の中に産学共同のプロジェクト提携を積極的に取り入れており、卒業制作では、企業と学生・教官がプロジェクトを組んで共同制作を行うケースが多いということである。これは企業との共同プロジェクトを通じて、より実践的なものづくりについて体験学習することを目的としており、必然的に地域の産業の実情をより広く知ることとなり、デザ

インを進めていく段階で、

実社会に必要な参考資料などを調査、収集することが求められる。この学習成果の卒業制作の発表において、中には企業との共同プロジェクトによってデザインなど意匠登録や特許などに関わり、公開が出来ないものも少なくない。共同プロジェクトによる成果が、企業に採用され、製品となったものが市場に出回り、販売され、実際に使われているとのことである。

ラハティ校デザイン学部での展示手法をみると、フロアーや廊下の壁面を有効に利用されており、スペースの装飾的效果も感じられた。

デザイン学部の展示を視察して感じたことは、デザインの知識、具体的な形にする技術などが有効的に組み合わせられていることのみならず、学生が常に目的意識を持って学習できる環境を提供していることである。これらの展示から、実社会へ即繋がる実践教育が示されている。



廊下の展示スペース



自店車用ヘルメットの
試作品展示



学生作品（モデル）のニッチ展示



教室の入口スペースに備え付けられた試作品展示スペース



作業室の一部にデスクワークの部屋がある

6. パッケージデザイン教育の動向

ラハティ・ポリテクニクでの「現代日本のパッケージデザイン」をテーマの講義を終えて、参加した学生との一問一答や、その後の限られた時間ではあったが、数人の教授との話からパッケージデザイン教育に対して、深い関心とその必要性を感じられている事を最初に報告する。また、ラハティ・ポリテクニクのパッケージデザイン担当教授は、産業との強い繋がりから経済を専門とする教員の指導であった。

今回は日本の現代のパッケージデザインを事例として、改めて「パッケージデザインとは何か」を、各自が問いかけ対峙して考える契機になることを目的に話した。一般的にはデザインは目に見える部分の意匠として、思われがちであるが、パッケージデザインが持つもう一つの重要な役目は、情報を創り正しく判り易く伝える事で、この両方がバランスよく果たされなければならない。今回は、改めてこのことを学生諸君に意識付ける機会とした。

講義では、なぜパッケージが必要なのか、また、プロダクトとしてのパッケージデザインが、今日地球規模で考えなければならない素材、資源、環境問題、そして創り出す事と同等に 消滅させる事の重要性や、パッケージデザインは時間を持っている事など幾つかの事例を紹介した。

パッケージは包みを開けた時点からゴミである。これらのことからパッケージデザインは様々な視座から、人の意識、価値観を捉え、クリエイティブをする事が重要な時代であり、その期待も大きな時代に入って来たともいえる。

幸いな事にラハティ・ポリテクニクにおいて、また多くの他大学においても、学生たちの「環境」に対する意識は高く、パッケージデザインの構成にとって重要なエレメントの一つとして捉えている。今後、彼らの考えから生みだされるデザインは、地球環境への配慮から、受動的に捉えた消極的デザインではなく、積極的にデザインエレメントの一つとして生かした新しい価値感の創造で、社会的に認知され、クリエイティブな環境を配慮したデザインとして手にする日が近いと期待が寄せられる。

次世代のデザインとは、益々国際的、学際的に知の領域の拡大と、生活世界における関係性を考慮した中から生まれるデザインである。今後、益々新しい社会、21世紀のIT化社会が進む中、世界共通の価値基準を持てるグローバルデザイン教育にて、作る力以上に「考える力」の育成と、物を「判断する眼」を養う事がとても重要になり、本学とは違う生活、社会環境であるラハティ・ポリテクニクとのエクスチェンジプログラムの継続、拡大は、学生のみならず双方の教職員にとって重要なプログラムと思える。

この度の講義で使用させて頂いたプレゼンテーションルームは、オーディエンスとの距離を感じさせない階段教室で、非常に講義しやすかった。本学においても、100人前後のプレゼンテーションルームの必要性が感じられた。

最後になったが、今回の講義でコンセプトの話など伝えにくい内容をフィンランド語にて通訳して頂いた児島宏嘉先生に、この紙面をお借りして深く感謝の意を表したい。



階段教室



前田教授によるパッケージデザイン講義風景（H15 受入留学生のサンナ・イアスと西頭学長も参加）

7. おわりに

1997年から始まった，ラハティ校との交流は，今回の訪問により施設を見学し，留学中の本学学生や派遣中の教員の活動状況を見て，着々と成果を現しているように実感した。また，学生作品の相互交流展の継続や友好協力協定にかかる両校の交流関係の一層の推進について，基本的合意に達したことは，大いに成果を収めることができたといえる。

なお，ラハティ校で進められている産業界との連携・協力プログラムが，成功している背景には，教員達による長年の大変な努力を重ねてきた結果が現在に至ったとのことであり，本学の教育をより効果的なものとしていくためには，教職員の，日頃の努力と工夫の積み重ねが必要であることを改めて実感させられた。このような努力が地域貢献の一翼を担っていることにもなる。写真は，ラハティ校の学生がデザインしたゴミ箱が製品として採用され，市内のいたるところに設置されているものである。こうした学生作品が街にあふれることにより，或る意味，作品の展示効果もあるのではないかと感じた。

フィンランドでは，日本の教育では見られない大胆な教育改革が行われているが，背景には経済社会の大不況があり，こうした教育の大改革を断行できたことが，世界トップレベルの経済成長率・国際競争力を持つ国に至ったものであると思える。

現在わが国の景気は上昇の兆しはあるものの，依然とした不況が続いている。今回，しらかば林約10haを経営する農林家を訪れた。50年生の太いしらかばはフィンランド家具の用材になるが，EU加盟後ロシアなどから安価な材木が入り，経営的に苦しくなったとのこと。ここでも国際化の一端を垣間見ることができた。

本学が位置する高岡市を含む富山県内においても同様である。このような状況を打開するためにも，地域における経済活性化を図る必要があり，大学は教育，研究，地域貢献を軸とした活動を推進していかなければならない。そのためにも，ラハティ校の運営方式など，今後の大学運営に大いに参考にしていきたいものである。



ラハティ市内各所で学生デザインによるゴミ箱がある（図書館前）



しらかば林の中にある農林家



農林家の主人とフィンランドの農林業経済について語り合う西頭学長と児島氏



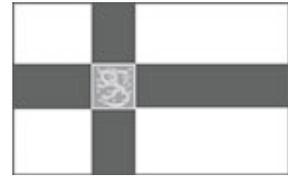
農林家の主人宅の納屋，北欧らしいデザイン

8．資料 - フィンランドの概要 -

8．1 基本情報

国旗¹⁾

フィンランド国旗は白地に青い十字が描かれている。国旗には、一般国旗と公式国旗の二つの形がある。一般国旗は長方形で、比率は縦11：横18、十字の幅は3、白地の各部分は縦4、横は旗竿側が5、外側が10の割合。公式国旗は長方形または先端が三つに尖った形の二種類あり、フィンランド国の紋章が十字の交差する四角い部分に挿入されている。各省をはじめとする国の機関や公共施設は長方形の公式国旗を掲揚する。先端が三つに尖った形の国旗は国防軍が用いる。



詩人サカリ・トペリウスが「祖国の湖の青さと雪の白さ」と詠んだ象徴的な色使いによるフィンランド国旗は、1918年5月29日に制定された法律により公式な旗となった。

紋章²⁾

紋章は、冠を着け後ろ足で立ち上がった黄金の獅子が赤地に描かれている。獅子は、籠手をはめた右前足で剣を振りかざしており、三日月形の刀を後ろ足で踏みつけている。剣のつかと籠手の継手は獅子とその冠同様に金色で、刃と籠手自体は銀色。獅子の回りには9つの銀色のばらの花が描かれている。



面積³⁾

33万8145平方キロ。国土の1/4は北極圏内にある。68%が森林、10%が湖沼、6%が耕地、その他13%。総面積のうち61%が私有地、29%が国有地、7.5%が民間企業の所有地、2%が地方自治体の所有地、0.5%が教会所有地。187,888の湖の大部分は湖水地方にあり、また南西海岸沖の群島（アーケペラゴ）を含めて179,584島のうち、98,050は湖水地方に点在している。

首都 ヘルシンキ

人口⁴⁾

約522万人（スウェーデン：888万人、デンマーク：536万人、ノルウェー：453万人、アイスランド29万人/2003年）。人口密度は平方キロ辺り約17人。人口の67%が都市部や町に住み、33%が農村地域に住んでいる。ラップランドに居住するサーミ人口は約65百人。

言語⁵⁾

公用語はフィンランド語とスウェーデン語。スウェーデン語を話すのは人口の6%で、大多数は南部・西部沿岸地方、オーランド諸島に住んでいる。その他にサーメ語がある。多くの地名はフィンランド語とスウェーデン語の2種類あり、道路標識も両方の言語で表記されている。

歴史⁶⁾

フィンランド人は、紀元前3000年以來フィンランドの地に居住していたとする最新の学説がある。

1155年 スウェーデンがフィンランドに十字軍を派遣、フィンランドはスウェーデン王国の一部へ

1809年 スウェーデンがフィンランドをロシアに割譲

1917年 12月6日に独立宣言

1919年 現行の憲法を採択、共和国として発足 同年日本と外交関係樹立

1955年 国連に加盟

1995年 EUに加盟

社会福祉 ⁷⁾

フィンランドでは、さまざまな福祉サービスや生活補助が整えられている。特に失業、疾病、健康上の問題による就労停止といった理由で生活弱者となる時期にも国民が平等な生活水準を維持し生活できるような制度が確立している。これら、社会福祉の各種サービスに関して決定は、国がガイドラインを決め、運営の詳細は各自治体に任されている。実際はフィンランドの自治体は、人口的規模が小さいため、複数の自治体が協同でサービスを提供し、また、民間の力も積極的に受け入れている。

経 済 ⁸⁾

農林業国から先進工業国に急成長。雇用の3.4%が第一次産業，32.6%が工業，64%がサービス業に従事（2002年）。世界経済フォーラムの国際競争力報告で2001年度は1位，2002年度はアメリカに次いで2位。経済活動の1/5を貿易が占める。対日本は輸出2.2%，輸入4.4%。

現地の気候・季節 ⁹⁾

高緯度に位置するもののメキシコ湾流の影響で比較的温暖。

春（3月～5月） 春が訪れるのは、まだ雪が深い3月頃。初春の日中の気温は0 前後で、夏に近づくにつれ10 以上まで上昇する。草木の芽吹きの間は、南部で4月下旬，北部ラップランドで5月下旬。湖の氷が溶けるのは、南部で4月頃，中部では5月に溶け，北部は6月になってようやくすべての氷が溶ける。

夏（6月～8月） 6月から8月にかけての夏の平均気温は20 前後。南部は北部に比べ1ヶ月ほど夏が長い。例年最も暑い時期は7月下旬で，30 を越えることも珍しくない。北極圏以北の地域では，太陽が地平線の下に沈まない時期が1ヶ月以上になり，フィンランド最北端ウツヨキでは，73日間も沈まない。南部でも日中の時間が最長19時間近くとなり，これが白夜と呼ばれる時期にあたる。

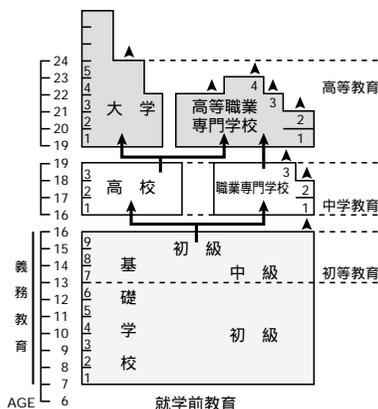
秋（8月半ば～10月） 8月半ばに夏休みが終わると日が短くなる。北部では8月末から9月にかけて，南部では9月半ば～10月初旬にかけて紅葉・黄葉（フィンランド語でRuska = ルスカ）の時期となる。初雪が降るのは通常9月から10月上旬だが，雪が積もるまで降るようになるのはさらに1ヶ月ぐらい後になる。

冬（11月～3月） フィンランド南部では雪がつもりはじめるのは12月の始めからで，4月には溶ける。湖が氷結するのは，11月下旬から5月半ばまで。北極圏（北緯66度33分）以北では，カーモスとよばれる太陽が地平線上にのぼらない時期が，12月下旬の冬至の前後で約1ヵ月半続く。2月を過ぎれば再び日が長くなる。一年のうちで一番寒いのは1月で，時には氷点下30度以下になることがあるが，乾燥した空気のために体感温度はそれほど寒くはない。

8.2 教 育 ¹⁰⁾

フィンランドの教育

フィンランドの教育制度は，総合学校，義務教育以降の普通教育と職業教育，高等教育及び成人教育から成り立っている。就学前の教育はフィンランド厚生省管轄下のデイケアセンター（保育所）で任意に受けられ，過疎地域では総合学校に併設されている。教育は公用語であるフィンランド語かスウェーデン語で行われ，スウェーデン語を話す少数派（人口の約6%）にもフィンランド語を話す人々と同じ教育の機会が保証されている。



【総合学校（義務教育）】

フィンランドでは、総合学校の修了を以って義務教育期間が完了する。7才（特別な場合は6才）で就学し、学校を卒業するまでが義務教育となる。義務教育制度は障害児にも適用され、通常の総合学校で教育を受けられない児童は、6才（2年の準備教育を経て）から11年間、個々の障害の程度によって専門的な教育を受けたり、特別学級や特殊学校へ通う。

総合学校は9年制で、6年制の初等課程（小学校）と3年制の中等課程（中学校）に分かれている。総合学校を修了しても、有利に進学するため更にもう一年在籍することができる。総合学校を修了した者は全て、同一の進学資格を有する。

総合学校の教員には修士号の取得が義務付けられている。初等課程の学級担任は教育学の学位、各科目の担当教員は各専門科目の学位の取得が義務付けられており、各学位プログラムには教育研修が含まれていなければならない。

総合学校教育は国の総合的教育方針と教育課程の指導基準に従って行われているが、地方自治体が実際の教育カリキュラムを編成し、年間の履修計画は各学校が立てている。1994年度の教育課程制度の改革以降、より自由な科目編成の権限が学校側に与えられるようになった。

総合学校教育は全ての生徒に無償で提供され、各地方自治体は、その地方在住の義務教育就学年齢児童全員に、総合学校教育を受ける機会を与えなければならない。

【義務教育修了後の教育】

総合学校を卒業した若者は、高等学校又は職業専門学校に進むことができる。職業学位の取得や高等学校の履修科目を修了するため、これまで以上に幅広い機会の提供を目的とした高等学校教育の試みが行われている。生徒はそのいずれからもコースの選択ができ、二つを合わせた複合学位も取得可能である。

国は1969年以来、義務教育修了後の中等及び高等教育すべての学生に対し、財政補助をしてきた。

1980年初めよりフィンランドの教育計画は、職業教育または高等教育を、全ての年齢層を対象に提供することを基本構想として掲げ、21世紀に向け、全ての年齢層を対象に普通あるいは職業高等学校教育を、また60～65%の人々に対し高等教育を提供する事を政策としている。

高等学校では大学進学を目指す生徒に、普通教育を行う。3年間勉強した後、国が行う大学入学のための一般的な資格基準である大学入学資格試験を受けることができる。他に、英国のポリテクニクと類似した高等職業専門学校AMK（Ammattikorkeakoulu= Politechnic）で勉強を続けるか、又は、中等教育後の職業学位を取得するかを選択が可能である。

1994年の教育課程改革後、選択科目の範囲が広がり、各学校が以前よりも個性を出せるようになってきている。高等学校の授業はすべてコース制を採用、4年以内に各自のペースで単位を取得することができる。成人向けには夜間の普通高等学校もある。

【職業教育】

フィンランドの職業教育は教育機関を通して行われる。産業一般を対象とした職業向けには、通常、総合職業学校で教育が行われるが、産業部門毎に専門化した学校もある。しかし、より幅広い学習を推進するために、専門化した学校を統合する事によって総合職業専門学校が増えている。

各自治体や複数の自治体による合同委員会が職業専門学校の大多数を所有しているが、一部は民間や国の所有になっている。理論中心の職業訓練教育に代わるものとして、実習生制度がある。実習生制度による職業訓練教育は文部省の管轄下におかれ、地方の教育委員会が実施している。実習生制度契約には基礎訓練と専門訓練の両方が含まれる。フィンランドでは実習生制度による職業資格取得は一般的ではなく、通常的基础職業訓練のわずか5%程度である。しかし実習生制度の契約数は、制度に柔軟性をもたせた1993年の法律改正の結果、増える傾向にある。最近の政府の教育開発計画では、実習生制度の契約数を毎年の職業専門学校入学者数の20%まで増やす事

を目指している。さらに、実習生制度的な社内研修をすべての職業訓練機関の資格要件に含める事となっている。

【高等教育】

高等教育は、伝統的な大学部門と非大学部門の高等教育機関によって行われている。

後者には現在、高等職業専門学校AMKにおける教育及び職業教育機関による高等教育の2つがある。対象年齢層の50%以上に高等教育の機会が与えられている。

大学院の研究は古くから国際的である。1980年代以降、学部生の国際交流促進も主要な目標となっている。海外で勉強するフィンランド人の学生数や交換留学生数、またフィンランドで勉強している外国人学生数は増加している。新たな高等職業専門学校AMKでは、当初から国際的な関係構築が要求されている。その大半は欧州の教育機関、また一部にはそれよりさらに遠隔地の教育機関や産業界との緊密な関係を構築している。また交流プログラムにも積極的に関与している。交換学生のバランスを図るために、大学及び高等職業専門学校AMKでは、外国語教育プログラムを拡充した。現在すべての大学と一部の高等職業専門学校AMKにおいて、一部は学位取得プログラムを含めた、英語を中心とした外国語によるコースやプログラムを提供している。

【大学以外の教育機関での高等教育】

高等職業教育の改革は、1991年の高等職業専門学校AMKの試験的設置法の施行を以って始まった。22の教育機関が試験的にこの新制度に参画した。試験的な取り組みの目的は、経験を積むことと、制度の確立前に、暫定的な高等職業専門学校AMKに独自のプログラムを開発する機会を与える事であった。最初の正式な高等職業専門学校AMKは、1996年秋に認可された。

高等職業専門学校AMKは、かつて高等職業教育を行っていた職業専門学校を昇格し、新たな総合的職業教育を行う学校へと再編されたものである。

高等職業専門学校AMKの運営免許は、各自治体、合同教育委員会、公認のフィンランドの財団又は協会に付与される。学校の運営資金は、国家予算及び地方自治体の両方に賄われている。政府はまた、業績の見返りあるいは開発プロジェクトの推進を目的として、追加資金を認める事が出来る。学校は、提供する授業内容にとって、あるいは職業生活に有効な範囲内で、研究開発に従事できる。高等職業専門学校AMKの授業料は無償である。

高等学校レベルの普通・職業教育を終了した者は一様に、高等職業専門学校AMK入学資格がある。選考基準については、各高等職業専門学校AMKが決定する。高等職業専門学校AMKの学位は、職場や開発の要請に見合うように作られた職業向けの高等教育資格であり、様々な専門的な仕事に適した学位保持者を養成する。

【大学教育】

フィンランドには大学が20校有り、総合大学は10校、単科大学は10校である。その内3校は経済・経営学専門、3校は工学・建築学、その他に、音楽、工芸デザイン、造形美術、演劇・舞踊が各1校である。スウェーデン語で授業を行っている大学が2校あり、フィンランド語の大学にも、スウェーデン語での授業を設けている所もある。

大学は全て国立で文部省の管轄下にあるが、教育、研究のみならず学内の問題については広範な自治が認められている。大学の財政の4分の3は国家予算で賄われる。大学は国家支出の約3%、教育・科学・文化支出の19%強に当たる。文部省と大学が行う実績主義による現行の運営制度の下、大学運営費は、基本経費（90%）、実績に基づく経費（5%）、プロジェクト経費（5%）から成る予算配分によって充当されている。プロジェクト経費は、国家的に重要な新しい研究や教育プロジェクトを目的として割り当てられている。大学は授業料を徴収せず、民間からの資金は全予算のわずか3%に過ぎない。

各年齢層の約60%は大学入学資格を取得している。通常、大学一年生の殆どは入学に必要な大

学入学資格試験に合格しており、同試験を受けていない学生はわずかに4 %である。1980年代の職業教育改革の過程で、大学入学の制度が、中等教育後の職業教育修了または高等職業教育修了資格を持つ学生にも導入された。この様な大学進学方法は以前は分野が限られていたが、1991年以降全学部が対象となっている。

政府は、必要とされる総労働力の予測に基づいて、各学部の卒業生数の国家目標を設定し、教育、研究の開発計画を立案する。大学は、毎年文部省との協議によって設定した学位取得の目標数に従って、入学割り当て数を調整する。どの学科にも「定員」がある。入学を認められる学生は、大学入学希望者の半数に満たないが、学部によってかなりの違いがある。大学は、正規の大学入学資格を有する志願者の中から、独自の選考基準に従って入学者を選出する。

大学の学位制度は、1994年以来再検討され、1997年秋までに、全学科レベルで改革が行われた。以前、大学の学位取得プログラムは、修士号など通常高い学位を目指すものであった。改革によって、ほぼすべての科目について学士号が導入された。また、学生は大半の分野で、博士課程に進む前に、博士課程前の学位であるリセンシアートを取得できるようになっている。

大学教育は、基本的に研究と教育の統合を目指している。芸術系大学も含め、全ての大学でリセンシアート又は博士号の資格が得られる。大学院教育は、多くの面で強化されてきている。1995年、研究者教育を補完するために新たな大学院制度が導入された。現在100近い国立研究所が、博士課程の学生に約1000の常勤の職を提供している。さらに、いくつかの分野における大学間の全国的なネットワークの構築、新たな国際的な提携先の確立、経済・産業界との協力関係の強化が図られた。

国の経済、社会、文化の発展にとって着実な研究開発の進歩は極めて重要である。フィンランドの将来の繁栄は、ますます研究開発と新しい技術がもたらす可能性にかかっている。将来の経済や、雇用、並びに知的・物質的繁栄は、強力で柔軟性のある革新的な制度に負うところが極めて大きい。フィンランドの研究開発の基本方針は、基礎科学研究・大学院教育及び技術革新を一つの柱に、技術・応用研究をもう一方の柱に揚げ、これらのバランスをとりながら進めることにある。フィンランドの大学は、内外の研究ネットワーク、優れた研究所、また大学院を持ち、研究が集中する中枢として大変重要な機関であり、基礎研究分野では、指導的役割を果たしている。

【成人教育】

フィンランドには成人教育に携わっている組織や教育機関が1000以上あり、全国で、年間160万人のための成人向け講座が開設されている。成人教育は正規の教育制度や、一般教養教育機関で、また社員研修を通じて行われているが、大部分は通常教育制度外で提供されている。個々の継続教育機関や仕事に関連した職場での職業訓練教育が最も一般的である。そこでは様々な資格取得のための勉強や継続学習をしたり、あるいはもっと自由な余暇利用や自己開発などのコースを取ることができる。主に職業教育を受ける人々に増加が見られ、仕事をもった成人は、年平均7日間の成人向け職業教育を受けている。大都市に偏る傾向はあるが、成人教育はかなり普及している。

各種教育機関が行う一般成人教育は、一部国の助成金で賄われ、残りは地方自治体や教育機関の経営団体、及び学生からの受講料によって補われている。職業学校、専門教育機関での成人教育の費用は、国と地方自治体が合同で負担している。雇用職業訓練は国が出資し、社員教育は主に雇用主が負担する。また全日制の成人教育を受ける人々には、国の教育補助制度が各種用意されている。

【一般の学校、職業専門学校、大学で行われる成人教育】

成人のための総合学校と高等学校教育は、夜間コースとして高等学校28校で開設された。

成人向け職業教育は、ほとんどの職業専門学校、また成人職業教育センター（44）や成人のた

めの専門職業教育機関（57）でも行われている。このような教育機関には職業資格と免許取得を目指すコースがあり，同時に継続教育や社員教育も行われている。4万人を越える成人が，若者と同レベルの職業資格や免許取得のための教育を修了し，成人教育受講者による資格取得比率は，全職業資格数の20%強となっている。しかし，職業教育の総授業時間数の約半分は雇用のための職業訓練に割かれている。

さらに技能労働者は，特定の試験によって上級職業資格や専門職業資格を取得できる。試験の中心は，修了に1～5日を要する技能試験であるが，理論等の筆記試験も受けなければならない。

全ての大学には継続教育センターがあり，公開大学講座や，大学卒業生向け継続専門教育，職業訓練を行っている。公開大学講座は，成人教育センター，夏期大学，市民カレッジなど300余りの教育機関の協力を得て全国的に開講している。公開大学講座の制度では学位を取得することはできないが，公開大学講座学位プログラムの約3分の1を修了した後，大学への入学を申請することができる。公開大学講座で最も人気のある分野は，教育，社会科学，人文科学で，最近は，自然科学，工学，経済などの科目が増設されている。

【職業訓練】

1991年以来労務当局は，需要に応じた雇用のための教育を，職業専門学校，大学や私設の教育機関に委託できるようになった。職業訓練は，失業者や失業の恐れのある人を対象としている。目的・内容・訓練期間は大きく異なるが，それにはこれから仕事につこうとする人のための就労準備研修を始め，職業・専門基礎教育や訓練などが含まれる。

【社員教育】

成人教育の最も一般的な形態は，社員教育である。社員教育とは，職業訓練コースの形で行われている専門職訓練や労働組合による職業訓練など全てを含み，費用は雇用主が一部又は全額を負担し，訓練期間中は通常の給料が支払われる。実践と理論を兼ねた情報技術のコースと商業や経営学のコースは，最も人気があった。受講者の半数以上は，職場や雇用者が保有する教育施設で，雇用者が準備した訓練に参加している。

【一般教養教育施設】

一般教養教育施設の中では，成人教育センターが最も幅広いネットワークを持っており，約280ヶ所の施設は地方自治体によって運営されている。成人教育センターでは，一般的で実用的な科目，語学・音楽・美術工芸・体育などのコースが履修できる。この他に，ほとんどのセンターが，総合学校・高等学校教育，公開大学講座，及び成人職業訓練コースを設けている。

市民カレッジ（Kansanopisto = Folk High School）は北欧式成人教育機関であり，寄宿制で通常私立学校である。学べる科目は後援組織により異なる。コースは大体一般教育の範疇に入り，総合学校・高等学校教育，職業訓練コース，公開大学講座も含まれる。数日間の短期コースから就学期間の長い，通常1年間の基礎学習コースまで幅広い選択が可能である。

学習センターは文化協会，労働組合，政党，宗教団体などの市民団体によって運営されている。これらの団体は，勉強会を開いたり，一般または市民社会に関する講義や講演会を全国で開催している。

夏期大学21校は，全国142ヶ所余りで成人教育の場を提供し，海外での研修コースも幾つか設けている。このような夏期大学は通常，民間団体により運営され，地域単位で機能している。夏期大学は，学生の受講料の外に，国や自治体からも資金援助を受けている。夏期大学は，公開大学講座や継続専門教育，及びより高度な職業教育と平行して，高等学校の教科，外国語などを含む一般教育を提供している。また様々な文化行事の主催も行っている。夏期大学のコースは，年齢や学歴に関係なく誰でも受講できる。

8.3 フィンランドのデザイン¹¹⁾

フィンランドのアルヌーボーの流れはフィンランド人の民族的伝統に根ざしている。19世紀後半、芸術家の間でフィンランドの文化遺産のすばらしさを見直し、工業化に対抗する、新しい息吹きの源泉としようという覚醒運動が起こった。この過去の文化を理想とする運動は「カレリアニズム(Karelianism)」という形をとった。

ナショナルロマンティシズム様式はこのカレリアニズムから生まれた。伝統的な素材、形、モチーフを出来るだけ用いることによりフィンランド固有の特質をきわだたせている。ナショナルロマンティシズムは一方芸術的個性の尊重や、同時代の海外の芸術からの影響を積極的に受け入れた。こうしてアルヌーボーの流れの中で、フィンランドのナショナルロマンティシズムに国際的な基盤が形成された。ナショナルロマンティシズム建築はまた完全かつ総合的デザインを目指そうとする動きを特徴とした。

1950年代に入ると、都市人口の急増によって需要も著しく拡大し、消費製品の多様化が求められた。産業界では商品の企画にますますデザイナーを用いるようになったため、芸術家の名前が商標あるいは品質を保証するものとなっていった。未開拓のデザインを発掘し、また自然の素材を使用する試みがこの時代の応用美術の特色であった。大戦によって中断されていたフィンランドの国際デザイン展への参加は、1950年代に本格的に再開された。フィンランドにとって、最も特筆すべき国際デザイン展は1951年の「ミラノ・トリエンナーレ」で、この年フィンランド・デザインは初めて高い国際的評価を得た。

1960年代のフィンランド社会は、急速な経済的並びに技術的發展と、それに伴う急激な変化によって特徴づけられる。大量生産が小規模の製造業に取って代わり、オートメーション化は製品のデザインや生産工程に支配的な影響力をおよぼした。大衆消費者向け製品産業は、新しい製造技術に加え、プラスチック、繊維ガラス、合成材料などの新素材の登場によって根本的な変革がなされた。貿易の増大と、その結果の文化の国際化もまたデザインの領域に反映された。

しかし1960年代に期待されたものは、1970年代になっても実現しなかった。成長への限界が間もなく明らかになったからである。エネルギーと天然資源が経済や政治の主要な問題となった。デザイナーの社会的責任について活発な議論がなされ、社会的な必要性がデザインの基礎になった。1970年代の工芸美術分野では、歴史的伝統を継承していくことへの強い関心が、専門的技能や技術に熟練する傾向の中に見受けられた。この工芸美術の伝統の見直しは、新しいライフスタイルを積極的に探し求める動きと連動していた。フィンランドのシンプルな表現形式は、新しいデザインや素材の実験にとって理想的な土台を提供した。

1980年代、フィンランドの応用美術の世界に、自己批判とともに自己覚醒の動きが興った。世界を席卷したポスト・モダニズムの影響がフィンランドのデザインにも見られた。この時代のフィンランドの応用美術は想像性、文化的な逆説手法、物体とその建築的環境との緊密性や、異なる芸術分野間の自由な動きを重要視するようになった。

家具や食器など日常生活用品のイメージは1980年代の初頭、急速な変貌を遂げ、デザインは収集の対象となる文化的価値のあるものとなった。既に1950年代からとりわけフィンランドの工業美術製品には高い価値が置かれていた。1980年代には産業とデザインの統合がさらに促進され、競争市場ではデザインの役割がきわめて重要なことが、一層多くの業界によって強調され始めた。

1990年代、フィンランドの応用美術は自己批判の時期を再び迎えた。工業デザインの分野では、森林産業に見られる斬新なデザインが格別な評価を得ている。フィンランド・デザインは、高い品質と時代を超越することの重要性を強調し続けている。

参考引用

1) ~ 6) , 10) ~ 11)

「フィンランド大使館，FINFO（フィンランド情報）」

7) ~ 10)

「フィンランド政府観光局，日本語公式ホームページ <http://www.moimoifinland.com>」